

2019年度国立天文台研究集会開催報告書

2019年 11月 05日

国立天文台長 殿

代表者	氏 名	(ふりがな) わだたけひこ 和 田 武 彦
	所属・職	宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究所・助教
研究集会名	2019年度光学赤外線天文連絡会シンポジウム	
開催期間	2019年 9月 24日 ～ 2019年9月26日	
開催場所	2019年度光学赤外線天文連絡会シンポジウム	
参加人数・国数 (国数は所属機関の国数)	参加人数 98名・国数 1 (ほかにテレビ会議にて20名参加)	
発表資料等 の 情 報	http://gopira.jp/sym2019/program.html 研究集会のプログラムや発表資料等をまとめたHPがあればURLを記載してください。提出後に作成された場合もご連絡ください。国立天文台研究交流委員会HPにリンクを張らせていただきます。HPではなく、論文や冊子を作成している場合は、可能であれば一部ご提供ください。(論文の場合はDOIの情報でも可)	
研究集会の概要	<p>光学赤外線天文連絡会(光赤天連)は、可視・赤外線天文学研究者の連絡組織であり、コミュニティの意見を取りまとめ、TMT、すばる、SPICAなど、国立天文台・JAXAが中心となって推進するフラッグシップミッションや各大学・研究者レベルで行われる小型・中規模プロジェクトの推進、将来計画の策定などを通じて、日本の光赤外線天文学の発展を目指した活動を行っている。光赤天連では、毎年シンポジウムを開催し、日本の光赤外線天文学コミュニティの将来計画や大学間の連携・活性化のための議論を行ってきた。</p> <p>本年は、マスタープラン2020推薦委員会での議論、重力波の発見とその後の光赤外線によるフォローアップに代表される波長横断・マルチメッセンジャー天文学の興隆、光赤天連「2030年代将来計画検討ワーキンググループ」での議論を踏まえ、2030年代に向けた布石として、ポストTMT、ポストすばる、ポストSPICAなどの長期的な戦略も含めた将来計画と、今後の光赤天連のありかたについての議論の場を設けるべく、光赤天連シンポジウム「2030年代を見据えて光赤天連のあり方を考える」を企画した。</p> <p>最初に光赤外線分野取り巻く状況について、現在進行形のプロジェクトの報告も含めてレビューを行った。次に「2030年代将来計画検討ワーキンググループ」での検討結果とそのLOIに応募した各将来計画からの報告、若手の意見、隣接他分野からの技術的低減や国際宇宙探査における政治的な状況の報告を踏まえ、2030年代に向けた将来計画を議論した。最後に近接他分野での将来計画決定の枠組みのレビューを行い、多波長横断型コミュニティへの再編も含めて、今後の光赤天連の在り方を議論した。全国から総勢120人(うち三鷹会場来訪者98人)の参加者を得て、活発な議論が行われた。</p>	

<p>研究集会の成果</p>	<p>本シンポジウムでの大きな成果は、光赤天連は今後も光赤外線天文学の大型プロジェクトを支えていくコミュニティであり続けるという意思を確認できたことである。また、独立したプロジェクトを追認するだけでなく、コミュニティとして切磋琢磨していこうという「2030年代将来計画検討 WG」の活動方針を確認できたことも大きな成果である。さらに、いままであまり注目してこなかった惑星探査とのリンクや、紫外線での観測について議論できたことも収穫であった。以下、各セッションでの成果を報告する。</p> <p>まず、宇宙理学委員であるISAS/JAXA山田氏と国立天文台TMT室の岩田氏・臼田氏によるレビューにより、スペース・地上での光赤外線天文学の現状を把握した。また、SPICA、JASMINE、ULTIMATE-Subaru、JWST、TAO、Tomo-e Gozen、PRIME、MOA-II、せいめい望遠鏡、大学間連携など、各プロジェクトの現状をレビューし、光赤天連の立ち位置を確認した。</p> <p>つぎに、「2030年代将来計画検討ワーキンググループ」の活動報告と、LOIに応募した各プロジェクトからの将来計画の報告を行った。また、各将来計画のPI等による集中的な議論を行い、2030年代、2040年代に向けた紫外線から赤外線に渡る将来計画の青写真を得た。また、米国 Astro2020やESA Voyager 2050、若手の意見、地球観測衛星や国際宇宙探査の現状が紹介され、国際的な旗艦ミッションに参加していくことの重要性とともに、独自のアイデアや計画を実施していくこと、ミッション立ち上げ期における大学と大学共同利用機関の連携と人材育成の大切さ、地球観測や惑星探査との連携の大切さなどが見いだされた。また、地上観測からのLOIの少なさや、スペースミッション提案に対するサポートの不足が指摘された。</p> <p>さらに、光赤天連の今後の将来計画策定の枠組み、光赤天連の在り方について議論するために、隣接分野（電波、X線、太陽、惑星科学）のコミュニティ代表などによる将来計画の講演と議論を行い、太陽コミュニティのような波長横断・サイエンス主導の軸も必要であるが、大型観測装置プロジェクトの推進には波長別のコミュニティによるサポートも必要であり、光赤天連は今後も光赤外線波長域でのプロジェクトの支持母体であり続けるとともに、光赤天連内外での波長横断・サイエンス主導のプロジェクトの支援を行うべきであるという共通認識が得られた。</p>
<p>その他参考となる事項 (希望事項も含む)</p>	<p>とくにありません。</p>